

### 3. イヨルイカ / イヨノッカ 子守歌

子守歌を沙流川下流地域や鷗川では *iyonruyka* イヨルイカ と言い、沙流川中流以上では *iyonnokka* イヨノッカ または *ionnokka* イオンノッカ と言う。他の地方では、*ihumke* イフムケ、*ihunke* イフンケ などとも呼ばれる。

*iyonruyka* イヨルイカ は、*i-onruyka* イ・オンルイカ《人/ものを・子守歌を歌って寝かしつける》、つまり《子守歌を歌って子どもを寝かしつける》という意味の自動詞であるが、これから転用されて《子守歌》という名詞としても使われる。中流以上で言う *iyonnokka* イヨノッカ の *onnokka* オンノッカ は、萱野茂氏によれば《あやす》という意味だとのことで、そうすると *iyonnokka* イヨノッカ (または *ionnokka* イオンノッカ) は《子どもをあやす》という意味だということになる。

北海道南部地方の子守歌は、舌の先をふるわせる音 (*hororse* ホロロセ、*rr* ルルと表記する) のくり返しが特徴的である。この舌先ふるえ音は子守歌のほか、鳥を模した踊りの歌にもよく用いられる。子守歌では、この *rr* ルル だけが続いていく場合もあるが、たいていはそれに歌詞が加わる。

叙情歌と同じく、即興歌である。いくつかのきまった語句と、きまった類型的なメロディーがあり、また一方、同じ人が同じ子守歌を歌っても、そのたびごとに、歌詞もメロディーも少しずつ違ってくる。舌先ふるえ音 (*rr* ルル) のくり返しを入れるところもはっきりきまっているわけではない。

子守歌であるから、子どもが寝つくまで、同じ内容をくり返したり、何かつけ加えたりして歌っていくので、長さもまちまちである。昔、子守歌は、おんぶして歩きながら歌う場合とゆりかご(ゆり板)をゆらしながら歌って子どもを寝かしつける場合とがあった。

おんぶする (*pakay* パッカイ) には、着ている着物の背中に子どもを入れ、荷物を背負うときのようにひもを頭に掛けて背負った。荷物の場合は荷縄 (*tar* タラ) と呼ばれるひもで荷

物をしばり、ひもの中央部を頭に掛けるだけだが、子どもをおぶうひも (pakkaytar パッカイタラ、萱野茂『アイヌの民具』によれば イエオマフ) は、子どものお尻の下に当たる部分に木の棒が左右のひもの間に渡してしばりつけてある。ひもの中央部を頭に掛けたら、ひもを後ろへたらし、着物の上から子どものお尻の下にこの棒を当てがい、棒より下のひもの両端を前に回してしばる。荷物の場合は、熊にでも出会ったときすぐ頭からひもをはずすだけで荷物を捨てて逃げられるように、決してひもを前でしばらないが、子どもの場合は背負ったまま逃げるためにしっかりと身にしばりつけるのだ、と古老は説明していた。

ゆりかご(ゆり板)は、木で作られ、そのような形をしており、その上にほろ布などがしかれ、四すみに綱をつけて天井の梁(はり)から吊って下げられていた。ほろにくるまれた赤ん坊がその上に寝かされ、落ちないようにしばってある。針仕事などをしている母親が、赤ん坊が泣くと、このゆり板をゆらして、子守歌を歌ったものだという。子守歌の中で *iresu sinta* イレス シンタ と言っているのがそれである。*iresu* イレス は《子育てする》、*sinta* シンタ は空中を飛ぶ舟のような乗り物で、赤ん坊の乗るゆり板を言うほか、口承文学の中では、神が空を飛ぶ乗り物を *kamuy sinta* カムイ シンタ《神のシンタ》と言う。子守歌の中ではよく、子育てのシンタ(ゆり板)を神のシンタになぞらえて、「神のシンタが天から降りて来た」というような表現も出てくる。「眠りのシンタ」とか「神の舟」、「眠りの舟」のように表現されることもある。さらに、舟やシンタではなく「神のおっぱい」、「眠りのおっぱい」が降りて来た、と歌われることもある。[イラスト：饗庭真理子]



イテキ チシ ノ  
(5) ITEKI CIS NO  
モ コ ロ ハ ニ  
MOKOR HANI

泣かないで

眠りなさいよ

サ タ モ  
Satamo

平賀サダ(サダモ)((福満))

オホ ルル ハオ ハオ oho rr hao hao	1	ねんねんよ	1-2) 舌の先をふるわせて出す音(hororse ホロセの音)をrrルルで表記する。
オホ ルル ハオ ホイ oho rr hao hoy	2	おころりよ	
イテキ チシ ノ iteki cis no	3	泣かないで	3-4) 3行目と4行目で3×6の18拍、つまり1行半分入っている。ここでは意味を考慮してこのように行分けした。
モコロ モコロ ハニ。 mokor mokor hani.	4	眠りなさいよ。	
エイタサ エチシ ヤク 5 eytasa e-cis yak	5	あまり泣くと	
ウエンカムイ バテテ wenkamuy patek	6	魔物にばかり	6-7) 直訳すると《悪い神ばかりがお前を好く》。wenkamuy ウエンカムイ《悪い神》をアイヌ語話者は「魔物」とか「化け物」とか訳していた。
エエラマス。 e-eramasu.	7	好かれるよ。	10-11) iresu sinta kurka イレス シンタ クルカ《子育てのゆり板の上》。韻文ではよく、位置名詞や後置詞の前で、その前の名詞句の最後の名詞を行の頭にくり返す。kurka クルカは、歌っている中で「」の部分伸ばすために、あとに母音をつけてクルーカと発音している。
オホ ルル ハオ ハオ oho rr hao hao	8	ねんねんよ	
オホ ルル ハオ ホイ oho rr hao hoy	9	おころりよ	
イレシ シンタ 10 iresu sinta	10	ゆりかご	
シンタ クル[ウ]カ sinta kur[u]ka	11	ゆりかごの上に	

カムイ オラン ナ、 kamuy oran na,	12	神様が降りるよ、	12-13) ran ラン は《おりる》、inkar インカラ は《見る》。o- オ《(そこに)、(そこへ)は iresu sinta kurka イレス シンタ クルカ《ゆりかごの上》を受ける。日常会話などで格助詞を使って言うようなことをこのようにそのあとの動詞に接頭辞をつけて表現するのは、歌や叙事詩などの言葉の特徴である。12行目では助詞 na ナ《よ》がついて5音節になっているが、13行目ではすでに5音節なので助詞 na ナはついていない。 14) nispa ニシパは長者(裕福な人)、同時に人から尊敬されるような立派な人でもある。 17) 歌は16行目で終わっている。当日サダモさんはかぜをひいて声がかれていたが、せっかく遠い所を訪ねて来てくれたのだから、と言って歌ってくれたのである。
カムイ オインカラ。 kamuy o[h]inkar.	13	神様が見まもってくれるよ。	
ニシパ エネ クシ ネ ナ。 nispa e=ne kus ne na.	14	りっぱな人になるんだよ。	
オホ ルル ハオ ホイ oho rr hao hoy	15	ねんねんよ	
オヤ ハオ ハオ 5 oya hao hao	16	おころりよ	
クハウエ ウェナウエ！ ku=hawe wen hawe!	17	私の声は、悪いねえ！	

3拍子の曲である。しかし3拍が2個ずつ組み合わさっているので、楽譜では6拍子として書いてある。そして多くの行で1行に6拍が二つずつ入っている。

この子守歌は、サダモさんが関東地方を巡業していたときに、舞台の上で毎日歌い演じていたものである。着物の中に人形を入れておぶい、舞台の上を歩き回りながら歌っていた。そのときアイヌのおんぶのしかたについて、男性古老の解説もあった。

初めの解説で述べたように、子守歌も、通常は、叙情歌と同様、歌うたびごとに即興性が入り、少しずつ違ったところが出るものだが、これは、毎日いくつかの小学校を回って、同じ歌を歌っていたからであろう、毎日同じ歌詞、同じメロディーであった。

[類歌] 次の(6)の子守歌の「類歌」を参照。

イヨンルイカ  
IYONRUYKA

子守歌

イテキチシノ  
ITEKI CIS NO

泣かないで

モコロハニ  
MOKOR HANI

眠りなさいよ

歌 平賀サダ(サダモ)  
採譜 田村すず子  
修正清書 奥田統己

*♩ = 96*

o- ho rr ha- o ha- o. o- ho rr ha- o hoy  
i- te-ki cis no mo- kor mo-ko- r ha- ni. ey- ta-sa e-cis yak  
wen-ka-muy pa-te- k e- e- ra- ma- su. o- ho rr ha-  
o ha- o o- ho rr ha- o hoy i- re- su  
si- n- ta si- n- ta. kur- ka ka- muy o-  
ra- n na, ka- muy o- i- n- kar. nis- pa e- ne kus  
ne na. o- ho rr ha- o hoy o- ya ha-  
o ha- o